

令和元年6月16日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02114

研究課題名(和文) オスマン軍楽隊メフテルのヨーロッパ社会への受容にみる太鼓文化の象徴性と機能の変容

研究課題名(英文) The Transformation of the Symbolism and Function of Drum Culture in the Acceptance of the Ottoman Military Band Meftel to Europe.

研究代表者

山本 宏子 (YAMAMOTO, Hiroko)

岡山大学・教育学研究科・教授

研究者番号：70362944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：中央ヨーロッパで収集した史料から、1683年の第2次ウィーン包囲の後、ザクセンのアウグスト強王がオスマンの戦利品を最も収集していることが確認できた。このことからオスマンの脅威が去ったヨーロッパで、各君主の新しい序列構築に、オスマンの戦利品が利用されたのではないかと考える。また、メフテルはヨーロッパの軍楽隊の楽器再編成を促した。メフテルの鍋型太鼓は戦利品として収集されただけでなく、新たな音楽機能を獲得し、ヨーロッパの音楽文化に変容をもたらした。今後は、収集した史料の詳細な分析を続けることで、鍋型太鼓文化の伝播と変容をよりいっそう明らかでできると考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オスマンの軍楽隊メフテルと鍋型太鼓が、ヨーロッパ社会にどのように伝播され、象徴と機能を変化させたかについては、これまでヨーロッパ側の研究者もトルコ側の研究者もほとんど取り扱ってこなかったテーマである。

戦場でのシグナル(合図)や自軍の鼓舞、敵軍の威嚇などの機能を持っていたメフテルのなかの鍋型太鼓が、ヨーロッパにおいて芸術音楽のなかでリズム楽器から低音楽器へと機能を変化させた過程を明らかにすることは、異文化理解の一助として社会的に有意義と考える。

研究成果の概要(英文)： From the sources collected in Central Europe, after the second siege of Vienna in 1683, Augustus II the Strong collect most of Ottoman's booty. So in Europe, when the threat of the Ottoman disappeared, Ottoman booty has been used to build new ranks for each monarch. Also, Mehtel urged the reorganization of the European military band. Kettle drums of Mehtel were not only collected as loot, but they also gained new music features and transformed the European music culture.

From now on, I think that it is possible to further clarify the propagation and transformation of Kettle drum culture by continuing detailed analysis of collected historical materials.

研究分野：民族芸術

キーワード：軍楽隊メフテル ターキッシュ・クレセント ドレスデン アウグスト強王 太鼓文化 ティンパニ 鍋型太鼓 トルコ行進曲

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでステップのシルクロード、海のシルクロードを通して、太鼓文化がどのように伝播・変容したかを研究してきた。本研究は、その成果を踏まえておこなうものである。

## 2. 研究の目的

ヨーロッパ社会がアジアの鍋型太鼓を導入して、ティンパニへと変容させたのは衆知のことである。本研究は、ヨーロッパ社会がアジアの太鼓文化を取り入れる過程で、太鼓の形態や音楽の構造だけでなく、太鼓の持つ象徴性や機能をどのように変容させていったかを分析考察するものである。東西世界の交流による太鼓文化の変容の様相を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

ヨーロッパ社会が、アジアの鍋型太鼓を導入してティンパニへと変容させたのは衆知のことである。鍋型太鼓を導入したきっかけは、1683年のオスマン帝国イエニチェリ軍による「第二次ウィーン包囲」とされる。からくも陥落を免れたウィーンの人々は、オスマンの軍楽隊メフテルを懐かしく思うようになり、それがヨーロッパでの軍楽隊の発足を促し、ひいては吹奏楽へ発展し、オーケストラでも鍋型太鼓を使うようになったという説が流布している。確かに、ヨーロッパにとって、オスマンは脅威であっただけでなく、同時にその文化は憧憬的でもあった。

かくしてヨーロッパ音楽で鍋型太鼓つまりティンパニが活躍するようになる。そして「第二次ウィーン包囲」から100年後のウィーンで、モーツアルトの「トルコ行進曲 K.331」やオスマンをテーマにした《後宮からの誘惑》などの芸術音楽が好評を博すのである。

1683年の「第二次ウィーン包囲」に際して、「誰」が軍楽隊メフテルから音楽情報を受け取ったのであろうか。また、「誰」が100年の時を経て、それをモーツアルトに伝えたのであろうか。中欧でフィールドワークをおこない、史料を収集することで、鍋型太鼓の持つ象徴性や機能の変容を明らかにする。

## 4. 研究成果

定説に反して、軍楽隊メフテルの伝播は、第二次ウィーン包囲当時に神聖ローマ帝国皇帝であったレオポルト1世(1640-1705、在位1658-1705)や、その後継者のヨーゼフ1世(1678-1711、在位1705-1711)、カール6世(1685-1740、在位1711-1740)ではなく、ザクセン選帝侯でありポーランド王であるアウグスト2世(1670-1733、アウグスト強王、選定候としてはフリードリヒ・アウグスト1世)と関わっていることがわかった。つまり「ザクセンの都ドレスデンやポーランドの都クラクフ」で、「アウグスト2世や彼の嫡出子や庶子の祝祭」において軍楽隊メフテルが出現したことが明らかになった。さらに、1720年に、オスマンのアフメット3世がザクセンのアウグスト2世に、軍楽隊メフテルを贈ったという言説が伝えられている。ただし、この件を立証する史料を、筆者は今のところ見つけだせていない。

そこで、その時代にヨーロッパとオスマンで描かれた絵画に現れたメフテルの比較を試みた。

1720年、オスマン帝国において戦乱のなかったチューリップ時代、アフメット3世(1673-1736、在位1703~1730)がおこなった祝祭の情景を、オスマンの宮廷画家レヴニーLevni(? 1732。本名は、アブデュルジェリル・チェレビ(Abdülcélil Çelebi)、レヴニーは雅号で、詩人・画家)が記録している。その『祝祭の書』には、レヴニーのミニアチュアが多数掲載されているが、そのなかにイエニチェリと軍楽隊メフテルのパレート(folios 158a-173a)を描いたものがある。ヨーロッパのものとしては、ザクセンの資料がある。1729年に、ザクセンで「国王陛下(山本注:アウグスト2世のこと)の庭園の眺め、庭園と宮殿を守るように命じられたイエニチェリの行進」という但し書き付きで《トルコ風庭園とイエニチェリの行進》(カール・ハインリヒ・ヤーコブ・フェーリング、1683-1753)が描かれた。

アフメット3世がアウグスト2世にメフテルを贈ったという説を検証するために、これら2件の絵画史料に描かれたイエニチェリと軍楽隊メフテルの比較をおこなっている。

#### ドイツ、ザクセンを中心とした史料収集

2015年は、アウグスト2世の宮殿のあるドレスデンで調査をおこなった。

ザクセン(現ドイツ連邦共和国の一部)の都市ドレスデンは、オーストリアのウィーンと異なりオスマン軍からの直接攻撃を受けたことがない。しかしながら、ザクセンの歴代の君主たちがオスマンと外交・戦争を繰り返してきた結果、ドレスデンにはオスマンに関する一級史料が大量に蓄積されている。戦利品である鍋型太鼓やそれらを使用した祝祭を描いたエッチングを中心に史料を収集した。さらに、比較のためにバイエルンの武器博物館などで実見調査し収集をおこなった。なお、ライプチヒのグラッシ楽器博物館Grassi Museum für Musikinstrumenteは、オスマン軍の軍囂(とう)であるターキッシュ・クレシェント(トルコの三日月)を多数所蔵している。ちなみに、ターキッシュ・クレシェントという名称はヨーロッパ側が付けたものである。英語、ドイツ語、フランス語で異なった名称を持つが、本稿ではターキッシュ・クレシェントで統一する。戦場では、軍囂は鍋型太鼓とともに使われ、非常に重要な存在であることを確認したので、史料収集の際には、鍋型太鼓だけでなく軍囂についてもデータを収集することとした。

#### スイスでの史料収集

2016年には、スイスで変化したターキッシュ・クレシェントの調査をおこない、さらに、イスラム文化における月のデザインとの比較に資する資料として、「月に立つマリア像」と「顔のある月」の意匠の写真撮影をおこなった。また、筒形太鼓文化圏のどこまで鍋型太鼓が侵出したかを明らかにするため、筒形太鼓についても資料を収集した。ブラハでも「月に立つマリア像」「顔のある月」「ターキッシュ・クレシェント」「鍋型太鼓」の現物とその意匠の所在確認をおこなった。さらに、ドレスデンでの追加調査をおこなった。

スイスでは、かなり変化したターキッシュ・クレシェントのコレクションがあった。三日月の向きが下向きになり、顔が付いたものもある。ハーブや、鶏、百合の紋章などが飾りに使われている。スイスでは三日月あるいは顔の付いた三日月が、イスラムの象徴としてではなく、「月に立つマリア像」に現れる。このマリア像は基本的には限られた時代に、ドイツ語圏の特定の地域でのみ作成されていた。三日月の象徴性を検討中である。スイスのある博物館では、オスマ

ン兵士の磁器を確認した。磁器で作られた軍燵は、三日月付いたターキッシュ・クレセントとは違い、ドレスデン城の博物館にオスマンからの戦利品として展示されている軍燵とよく似た意匠である。マイセンやドレスデンでは収蔵されていない、また図録にも掲載されていない、かなり残忍なポーズをとるオスマン兵士の磁器の存在、しかも制作年代が分かる磁器を確認できたことは、当時のドレスデン側のオスマンに対するイメージを探る資料になると考える。

スロバキアのプラチスラバ、ポーランドのクラクフを中心とした史料収集

2017年、ウィーン、グラーツ、プラチスラバ(スロバキア)における「月に立つマリア像」「顔のある月」「ターキッシュ・クレセント」「鍋型太鼓」「ティンパニ」の史料収集および、プリンス・オイゲンのオスマン関係資料を調査した。さらに、ポーランドの古都クラクフで同様の調査をおこなった。その成果は以下のとおりである。

ウィーンの調査では、プリンス・オイゲンのオスマン・コレクションでティンパニが1台確認できた。ただし、皮をねじ留めしているため、オスマンの軍事用鍋型太鼓ではなく、ヨーロッパ化したティンパニだと考えられる。ターキッシュ・クレセントは見つからなかった。

グラーツは、かつてはオスマン軍に対するキリスト教国の軍事拠点として重要な地であった。武器庫にはオスマンとの戦闘に備えて大量の武器が保管されていた。現在展示されている武器は、すべてヨーロッパ型のもので、オスマンからの戦利品の武器コレクションは皆無だった。グラーツは戦場にはならなかったため、また、戦利品は王侯貴族の宮殿で披露されるものであって、城塞都市でコレクションされることはなかったと考えられる。

ポーランドの古都クラクフでアウグスト2世(強王)やアウグスト3世がポーランド王即位式で使用したオスマンの馬装具などを確認した。しかしながら、クラクフでは、オスマン戦争の図像には、アウグスト親子よりも、第二次ウィーン包囲でヨーロッパに勝利をもたらしたヤン3世が描かれているものが多いことがわかった。馬毛の装飾のついた旗印が描かれているが、ターキッシュ・クレセントではなく、第一次ウィーン包囲の時代のオスマン軍の軍旗に類似した形態をしている。オスマンからの戦利品と思われる鍋型太鼓とヨーロッパ化したティンパニの両方を確認することができた。ウィーンとクラクフで、文献資料もある程度の収集をすることができた。*Die Turken vor Wien ;Europa und die Entscheidung an der Donau 1683.* (1983, Historischen Museums der Stadt Wien のカタログ)を入手した。

インスブルックでの史料収集

2018年3月、バジリカ・ヴィルテン Basilika Wilten (ヴィルテン巡礼教会)と Suift Wilten 修道院付属教会の記録作成をした。「顔のある月」の意匠があった。

ブラハでの史料収集

2019年2月、チェコのブラハ、クトナー・ホラ、チャスキー・クロムロフ、チェスケー・ブディエヨヴィツェ、そしてオーストリアのザルツブルグ、ドイツのミュンヘンで史料を収集した。

ブラハでは、国立博物館(楽器博物館)で、ティンパニとターキッシュ・クレセントの調査をおこなった。ドイツ語および英語の多数の楽器図鑑などには「ブラハ博物館所蔵のターキッシュ・クレセント」というキャプションで写真が掲載されているが、現物がブラハ博物館ではなく、

地方の博物館に収蔵されていることがわかった。プラハ市内の教会や博物館で「顔のある月に立つマリア像」を数点確認した。帰路、ザルツブルグでも「顔のある月に立つマリア像」を確認した。また、トルコをテーマとした楽曲の楽譜資料を収集した。ミュンヘンでは、州立グラフィック収集館で、デューラーが1515年描いたティンパニとトランペットの合奏図の確認をおこなった。また、ミュンヘン市立博物館楽器部門でティンパニとターキッシュ・クレセントの調査をおこなった。

おわりに

以上述べてきたのは収集した史料のごく一部であるが、ヨーロッパで収集した鍋型太鼓にまつわる史料から、以下のようなことが考えられる。

1529年の第一次ウィーン包囲のころに、ヨーロッパ・キリスト教世界が抱いていたオスマンに対する憎悪と脅威の感情は、そのころの絵画作品・工芸作品から知ることができる。

他方、第二次ウィーン包囲のあとでは、アウグスト強王がオスマンの戦利品を最も収集していることから、オスマンそのものに対する脅威ではなく、むしろヨーロッパ社会のなかで各王国がどのような新しい秩序をつくるかに、オスマンからの戦利品が利用されたのではないかと考えられる。さらに、メフテルはヨーロッパでの軍楽隊の楽器の再編成を促した。戦場で使われていた鍋型太鼓は、戦利品として収蔵されるだけでなく、新たな音楽機能を獲得し、ヨーロッパ社会の音楽文化に変容をもたらしたと考えられる。今後は、収集した史料の詳細な分析を続けることで、鍋型太鼓文化の伝播と変容をよりいっそう明らかにするつもりである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

齋藤武、Tuna, Hüseyin、山本宏子、根岸啓子「日本で発足したオスマン・トルコの軍楽隊メフテル—2018、日本とトルコのコラボ—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』、査読なし、170巻、2019、pp.51-59、[bgeou\\_170\\_051\\_059.pdf](#)。

〔学会発表〕(計1件)

山本宏子、「鍋型太鼓とトゥに付けられた顔のある三日月」、民族芸能学会、2018年

〔図書〕(計1件)

山本宏子、青弓社、『太鼓の文化誌』、2018、288ページ

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

「日本人とトルコ人のコラボレーションによるオスマン・トルコの軍楽隊メフテルの演奏」のコーディネートおよび採譜による楽譜作成、演奏指導をおこなった。

・2018年7月14日（土）「トルコフェスティバル」でのステージ演奏（於：東京都港区芝公園、主催：トルコ経済省など）

・2018年7月15日（日）「Yokohama Sparkling Twilight」でのパレートおよびステージ演奏（於：横浜市山下公園、主催：横浜スパークリングトワイライト実行委員会、横浜市、横浜商工会議所、横浜港振興協会他）

山本宏子、「ヴェネツィアとオスマン・トルコ」『全日本郷土芸能協会 会報』、査読なし、93号、2019、p.16 .

山本宏子、「トルコのナッカーレを打ってみる」『全日本郷土芸能協会 会報』、査読なし、92号、2018、p.16 .

山本宏子、「ポーランド、クラクフの文化とティンパニ その2」『全日本郷土芸能協会 会報』、査読なし、90号、2018、p.12 .

宏子、「チェコ、プラハの夏とティンパニー」『全日本郷土芸能協会 会報』、査読なし、85号、2016、p.9 .

山本宏子、「スイス、バーゼルの春と太鼓」『全日本郷土芸能協会 会報』、査読なし、84号、2016、p.12 .

山本宏子、「マイセン陶磁器館とティンパニー」『全日本郷土芸能協会 会報』、査読なし、83号、2016、p.18 .